



## スポーツと知性

---

大山 下 圭悟  
体育科学系講師

体育を生業にしている私にとって、前号の特集、「からだの教育を考える」は、まさに「自分の畑」の問題であり、興味深く読ませていただいた。とくに体育を専門としない方がこの畑をどのように見ておられるのかという点は私自身の社会的な存在意義にもつながる問題であり、おそろおそろ注目した次第である。そこで、前号に掲載された原稿のいくつかから、体育・スポーツ自体、あるいはその効用を特徴づけることばとして目に付いたものをざっと抜き出してみたく・・・体を動かす機会／減った気分を気持ちよく晴らす／体育への参加の動機付け／スポーツの楽しさを知る／相手とのコミュニケーション／知見を広げるための体力の獲得／人間であることの真実を感じる場／己を知るといふ教養教育／やる気を引き出す／できなかったことができるようになる達成感／根性・努力の大切さを知る／プレッシャーの克服／自己の身体に対する正しい理解／教養としての自己健康管理能力・・・>。

こうしてこれらの言葉を見てみると健康維持の機能や、体験や達成自体の重要性に視点のあるもの、自己の鍛錬の場としての見方など、体育・スポーツは目的を達成する手段として見られている傾向が強いと言えそうである。教養としても、健康に志向した知を得る機会としては認められているものの、運動のなかに息づく知性についてはあまり注目されていないように思える。

スポーツ選手として成功するためには、単に動きづくりを行ううえでも、知性が求められるものである。例えば陸上競技の技術改善の過程というのは、力学的な事実や生理・解剖学的な可能性・制約をもとに実現可能な技術を開発するところから始まり、出力系（神経-筋・代謝系）の最適化、最終的には技術を定着・実行する作業までを包括している。この知的活動と実践のかみ合いこそがスポーツの醍醐味であり、運動後の爽快さ、健康への効用にまさる楽しみなのだと思などは思ってしまう。実際、この過程が記録の向上に繋がったときの痛快さといったら、他の何ものにもかえがたいものである。一体育人としては、実践とともに筋肉を鍛え操る知性があるからこそ、素晴らしい技術が生まれるのだということを、一人でも多くの人に知ってもらいたいと願うばかりである。

(おおやまけんけいご 陸上競技コーチ論)